

# 戦後福沢国民学校における報徳教育の再評価

—民主主義・民主教育への「転回」—

須田将司\*

武藤正人\*\*

本稿は、石山脩平指導による「福沢プラン」や著書『農村地域社会学校』で知られる神奈川県足柄上郡福沢小学校の実践を、戦前の報徳教育からの「転回」という視点から再考したものである。特に、史料的に乏しく、先行研究でも不問とされてきた「空白の1946年度」に焦点を当て、新出資料や当事者への聞き取りを用い、かつ当時の報徳運動や新教育研究等の動向を重ね合わせながら実相に迫った。

その結果、報徳運動の指導者も、戦後の福沢国民学校の教員らも、民主主義を標榜する社会や教育に対し、「戦時的」な部分を払拭した報徳は十分適用可能だと考えていたことが明らかになった。特に、報徳の教えである推譲、常会等は普遍的なものと考えられていた。福沢国民学校の教育研究をリードした井上喜一郎は、デューイ哲学と報徳哲学との対比を経て、報徳教育の「戦時的」な部分の払拭と、教師の権威性の排除と子どもの自発性の尊重とを結びつけていく。そして「発展の原理」、「個性の原理」、「社会性の原理」、「自発性の原理」等の観点から新教育を論じる際に戦前以来の学校常会・学級常会・母子常会を繰り返して例示し、民主教育の具現に不可欠なものとして意義付けた。戦後福沢国民学校における民主教育への「転回」は、報徳教育の再評価という文脈で推進されたのである。

キーワード：報徳運動／報徳教育／農村地域社会学校／常会／戦後初期社会科

## はじめに

戦後初期社会科において「農村型社会科の実験校」<sup>1</sup>として知られる神奈川県足柄上郡福沢小学校は、文部省教科書局第二編修課長・教材研究課長であった石山脩平の指導を受けつつ実践研究を進め、1951（昭和26）年2月に『農村地域社会学校』<sup>2</sup>を刊行した。2001年の復刻版の解説において、石川松太郎はその特徴を2点挙げている<sup>3</sup>。

- ①大戦後の民主教育を指標に、地域教育計画を作成したのは、川口プランをはじめ、全国三百か所以上にのぼっている。けれども、この福澤プランのように、純平場農村を対象とした事例は希少である。それだけに、福澤プランは、きわめて郷土色の強いのが特徴の一

つとなっている。

- ②多くの地域教育計画と同じく、ここでもコア・カリキュラムの形態をとっている（中略）ただ、石山が社会科の創設・推進者の一人であったところから、また井上校長が同科に造詣が深かった点で、中心課程が同科の内容・性格に著しく近い。

ここには、郷土色の濃い地域教育計画の実践例、戦後初期社会科の代表例という姿が示されている。それは、長らく教育史・教育学研究上における福沢小学校の典型的な評価とされてきたといえる。

しかし、同校は戦前期に足柄上郡をリードし、県から研究指定を受けるほどの報徳教育実践校であった<sup>4</sup>。当事者の視点に立つならば、戦前以来

\*すだ まさし 東洋大学文学部教育学科

\*\*むとう まさと 東京都立小山台高等学校教諭

の報徳教育の前途に、戦後の民主教育や実験学校の指定、石山脩平の指導が登場したのであり、そこに新たな教育目標の策定や実践方法の模索が要請されたといえる。実際、『農村地域社会学校』に序文を寄せた文部省事務官・長坂端午は「終戦後三四年は、少なからず迷い、あせつて来たが（中略）よく着々と校風を一定の方向に樹立して来ることができたのであろう」<sup>5</sup>と述べ、校長・井上喜一郎もまた、「戦後の民主教育の推進にあたり、その理論の究明と実践との矛盾に苦悩を感じていた」<sup>6</sup>ことを述懐している。ここに、『農村地域社会学校』だけに拠った従来の評価を捉え直し、報徳教育からの「転回」という視点から実践を再考することが課題として浮き上がってくる。

では報徳教育からの「転回」は、「いつ」、「どのように」模索されたのであろうか。『農村地域社会学校』刊行に至る経緯を、同書は8つの段階に分けて述べている<sup>7</sup>。

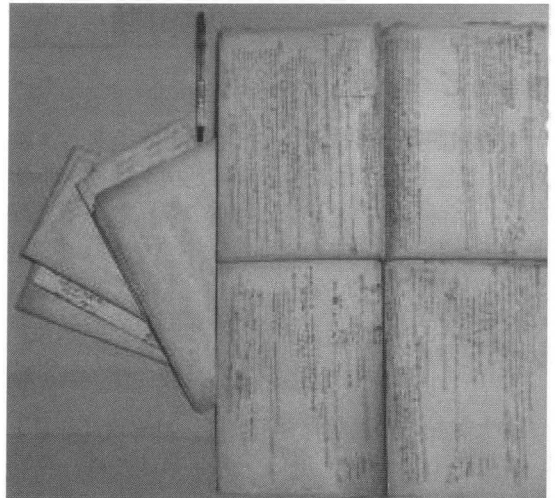
- ①終戦後の悩み
- ②社会科研究以前の基盤
- ③社会科研究第一期（問題単元学習期）
- ④第二期—学習単元の設定
- ⑤第三期—教科課程表による学習指導計画
- ⑥第四期—生活カリキュラムの構成  
（昭和23年度）
- ⑦第五期—生活カリキュラムの実践的研究  
（昭和24年度）
- ⑧第六期—学校経営面—（生活カリキュラムの実践的研究）（昭和25年度）

その内容から、①②③が1946（昭和21）年度、④⑤が1947（昭和22）年度、以後、⑥⑦⑧までがそれぞれ1948（昭和23）～1950（昭和25）年度と判別できる。しかしながら、特に初期段階ほど不明な点が多い。例えば、福沢小学校『学校沿革誌』では1946年1月11日を最後に1947年7月10日の井上喜一郎校長就任までの記載が欠落しており、欠落理由もさることながら、これにより1946年度の経緯を全く辿ることができない。この欠落期間に石山脩平が福沢校に関わったことは間違いないのだが、当事者による回顧録<sup>8</sup>や、当事者への聞き取り調査<sup>9</sup>ではその時期に食い違いがある。石山の日記『留魂録』があるが、1946年中の欠落も多く、正確な日時が特定できない。

それは研究内容に関しても同様である。『農村地域社会学校』では、「①終戦後の悩み」のなかで、「至誠実行」、「勤労創造」、「推譲協和」、「分度自律」というめあてを立て、「発展の原理」、「個性の原理」、「社会性の原理」、「自発性の原理」、「実証の原理」、「自由の原理」、「効率の原理」、「健康の原理」の8観点から新教育研究を進めたという注目すべき記述がある<sup>10</sup>。ここに、報徳教育を土台に戦後の民主教育を原理的に解釈していった様子を窺うことができるのだが、8観点は「詳細略」とされている。このように、報徳教育から『農村地域社会学校』への転換点にあった福沢国民学校の姿は「空白の1946年度」ともいべき時期にあり、また、これまでの先行研究でも不問に付されていたのである。

本研究に際する調査の過程で、1947年2月26日付の井上喜一郎の指導案のほか、陸軍野紙に記された井上喜一郎「本校に於ける新教育の実際」、神奈川県足柄上郡福澤村国民学校教官井上喜一郎「児童自治と母子常会」、「本校の目標」、そしてB0版の紙に記された複数の草稿メモ類（図1）が発見された（以下、〔井上喜一郎文書〕とする）<sup>11</sup>。

図1 「新教育と報徳教育」ほか草稿メモ類



陸軍野紙を使用していること、国民学校教官と名乗っていること、内容が「終戦後の悩み」に相当する報徳教育と新教育との対比に関するものであること等から、〔井上喜一郎文書〕は敗戦～1946年度内に作成された資料であると推定できる。特に「本校の目標」では「健康の原理」を除

く7つの観点が詳述されており、先行研究（教育史実）の空白を埋める内容が含まれている。

また、「本校に於ける新教育の実際」の原稿には、1946年6月6日に加藤仁平が詠んだ「高松宮殿下の令旨を拝して」という紙片が挟められていた。これは、GHQのインボーデン少佐がリンカーンになぞらえて二宮尊徳の事蹟を称えたことを記した内容のものであり、井上喜一郎がこの出来事に刺激を受けていたことを窺わせる資料といえる。先述した『農村地域社会学校』中の言と重ね合わせるならば、1946年度中に井上喜一郎は、戦前以来の報徳教育の理論と実践を手掛かりに、民主教育の「理論の究明と実践との矛盾」の解決を求めていったといえるのである。

以上のような課題意識に基づき、本稿は「空白の1946年度」の実相解明を中心に、戦後初期に報徳教育から新教育研究へと「転回」していく経緯と、その理論を明らかとしていく。方法として、第一に井上喜一郎の研究に間接的な影響を及ぼした、戦後初期における報徳運動をめぐる状況を概観する。その上で、第二に「転回」の経緯を、これまで用いられてこなかった石山脩平の日記や当事者の回顧録、そして武藤正人による当時の教員・加藤フク氏への聞き取り調査記録（未刊行）<sup>12</sup>などを用いながら、多面的に浮き彫りとする。そして第三に、理論面を新発見の資料群を中心に明らかとしていく。（須田）

## 1、戦後初期報徳運動をめぐる状況

先述したように、井上喜一郎にとって、GHQのインボーデン少佐が二宮尊徳を高く評価したことは、自らの教育実践構築に少なからず励みを与えたと考えられる。その証拠に、井上喜一郎は「本校に於ける新教育の実際」の途中に「進駐軍のインボーデン少佐が報徳に関心するのも、そこに民主主義の精神があるからこそと思ひます。文理大の加藤仁平先生の高松宮殿下の令旨を拝してといふ詩を読んでみたいと思ふ」と、わざわざこの出来事を取り上げていたのである。そこで、ここでは報徳運動の戦後初期における動向を整理するとともに、その主な担い手が戦後の報徳運動へと転回あるいは継続していった回路について分析を試みたい。

報徳運動とは、二宮尊徳（1787年～1856年）の創始した報徳仕法という生活様式を、門人たち

が報徳社の結社という形で受け継ぎ、指導し、広めていった運動である。この運動の特徴は、報徳社の結社や常会構想によって、明治以降の地方改良運動や、昭和恐慌期における農山漁村経済更生運動あるいは大政翼賛会運動などの国策と連動して広範囲に展開したことである<sup>13</sup>。そのため、戦中においても、指導者が「国民に体制への翼賛を説き、国家への忠誠・滅私奉公を盛んに強調した」<sup>14</sup>側面が強くみられた。

しかし、昭和初期における報徳運動の実質的な指導者であった佐々井信太郎は、報徳運動の拠点となった大日本報徳社の機関誌である『大日本報徳』の「終戦号」において、次のように述べている<sup>15</sup>。

報徳の道とする所は開闢の大道を顕揚せさせ給ふ大業を詔を承つて行ひ奉るのでありまして、一切の徳を愛育するを以て報ゆるとなすのでありますから、素より侵略占有の野望を果すが如きは其の根本義に反します。（中略）

然らば問題は如何にして総国民が承認謹行以て皇国の大道を顕揚する一途を進み得るかといふことであります。それは報徳の教によるを最良の方途であると信ずるものであります。（中略）絶対に侵略せざる平和の生活であります。（中略）

報徳の教は二宮先生の教へられた様に「我国万古に存し我道万世易らず」でありまして、大戦前に尊ばれて居た仕法は、その儘戦後経営、再復振興の最上の方途であると信じて居ります（中略）報徳の道は如何なる時期にも最も基礎的な徳を根本とする生活方法でありますので、時局の変遷に拘らず、報徳生活は最も良い生活法と存じますから、報徳の道によつて錬成せられたものは勿論、更に一般人に勤奨して已まざる様御努力を願いたいのであります。

このように、「皇国の大道を顕揚する」ために「報徳の教」が「最良の方途」であり、「平和の生活」と説いているのであるが、戦前期における言動を自省するのではなく、むしろ「大戦前に尊ばれて居た仕法」が、「その儘戦後経営、再復振興の最上の方途である」としている。すなわち、佐々井

ら報徳運動の指導者にとっては、「侵略占有の野望を果たすが如き」の戦争は、報徳の「根本義に反」するのであって、「平和の生活」こそ二宮尊徳の教えである報徳に適う理念であると主張しているのである。

このように、時局に応じていわば全体主義にすり寄っていくような側面とも相まって、特に昭和戦前期の報徳運動をファシズム運動の一端を担ったものとする論考もある<sup>16</sup>。しかし、上述した佐々井の言説を見れば、報徳そのものが戦争のイデオロギーなのではなく、一元融合、分度、推譲、常会実践による「芋コジ」（芋と芋とをこすり合わせて汚れや皮を落とす例え）といった尊徳以来の生活改善のための仕法が、時代の要請にこたえるという自信が、戦後の報徳運動を支えていたと理解することが出来よう<sup>17</sup>。

それでも、報徳運動が「承詔謹行」を自認し、国策遂行を積極的に推し進めていったことは事実である。その意味で、戦前戦中期における報徳運動に対する否定的な評価が戦後なされることもあった。そのような戦後初期の報徳運動にとって好運であったのは、GHQ（連合国軍総司令部）側によって報徳が高く評価されたという事実であった。この事実の立役者であり、報徳運動の指導者の一人でもあった加藤仁平は、後にこう述べている<sup>18</sup>。

天照大神を中心として、戦争のためにも貢献することの少なくなかった報徳同志は、(中略)GHQがどんな態度に出てくるか一抹の不安を禁じ得なかつただけに、非常に喜んでくれた。やがて発足した全国報徳連合会や報徳青年運動や報徳民主同盟や、報徳同志会なども、多かれ少なかれ、その刺激を受けたことは否定できない。

ここには、「戦争のためにも貢献することの少なくなかった」報徳が、GHQによってどのような扱いを受けることとなるのか、「一抹の不安」を抱いていたことが正直に吐露されている。では、GHQが報徳を高く評価したとは、どのような出来事を指すのであろうか。

以下は、雑誌『青年』の1949年10月号に掲載された、GHQ民間情報教育部新聞課長、ダニエル・C・インボーデン少佐の「新生日本は二宮尊徳の

再認識を必要とする」と題する論文の冒頭である<sup>19</sup>。

民主主義というものは、個人が誤りのない理性と、はげしい人間愛をもって真理を追究するとき、必ず到達する唯一絶対の結論である。これは人種、国柄の如何を問わない。一口に封建時代と片づけられてしまう日本の過去の歴史の中にも、そうした真理追求のために身を挺した人物が、幾人かはいるのである。その一人尊徳二宮金次郎こそは、近世日本の生んだ最大の民主主義的な——私の観るところでは、世界の民主主義の英雄偉人と比べ、いささかのひけもとらない——大人物である。祖先のうちに、このような偉大な先覚者をもっていることは、あなたがた日本人の誇りであると共に、日本の民主主義的再建が可能であることを、明確に証明するものであろう。私は日本に来て、その歴史にこの人あるを知り、地方によっては、その遺業がさかんにうけつがれているのをまのあたりに見て、驚きと喜びの情を禁じえない。

インボーデンをして『青年』誌上に上記の如き賛辞を書かした経緯は、概略以下の通りである。

1946年4月、静岡新聞社長大石光之助は二宮尊徳のことをGHQの面々に知ってもらうべく、CIC（米国陸軍防諜部隊）のドーリン大尉を静岡県庁に招き、教育学者加藤仁平らとの対談をなさしめた。この対談記録が『静岡新聞』に連載されると、「戦後日本のジャーナリズム界の支配者<sup>20</sup>」と称されたGHQのインボーデンは尊徳に興味を抱き、同新聞社を介して5月に放送会館へ加藤を招く。これが契機となって、マッカーサーから「お前はこの偉人の生涯を調査研究せよ」<sup>21</sup>と命じられたインボーデンは、加藤と共に静岡県掛川町の大日本報徳社を訪問し、社長の河井弥八、副社長の佐々井信太郎、そして顧問の鷲山恭平等を紹介された。これら報徳社の指導者による報徳に関する説明を聞いたインボーデンは、「日本にもこういう偉大な人物とりっぱな組織があるのか」と驚嘆し、「こういう偉大な人はアメリカのリンカーンにも匹敵する人である」と語ったという。この時の様子も『静岡新聞』は「インボーデン少佐、掛川へ 報徳精神に感嘆‘日本再建、この理念で’

という見出しで伝えた。これらの出来事が後押しとなり、9月には「報徳連合会」の発会式がインボorden夫妻を含む多数の参列のもとに小田原市報徳二宮神社で行われた<sup>22</sup>。

このことに自信を深めた加藤をはじめとする「報徳人」は、「全国報徳連合会」、「報徳青年運動」、「報徳民主同盟」、「報徳同志会」などの組織を通して活動を展開するようになり、報徳に関係する国会議員が何人も出現すると、報徳党といった名称で政党を結成すべしなどという議論もあった<sup>23</sup>。

なお付言すれば、アメリカ側が二宮尊徳について知ったのはこの時がはじめてではなく、太平洋戦争末期にB29がまいたビラに「民主社会建設のために生涯を捧げた民主主義の先覚者二宮尊徳に学べ」などと書かれたものがあったことや、内村鑑三が1908年の段階で既に“Japan and Japanese”（『代表的日本人』）の中で尊徳を「農民聖人」として書いており、「民主主義者としての二宮尊徳」というイメージが、米国側にも多少胚胎していた可能性が高い<sup>24</sup>。もっとも、GHQが尊徳に注目してこれを高く評価した背景には、戦後の民主化を「上からの押し付け」ではなく、日本固有の伝統や文化の中で培われた土壌の上に根付かせようとするねらいもあったと考えられる。「基本的人権と人格と個性とを尊重する民主主義を、建設的に積極的に推進させる」ために、「日本固有の報徳という日本的な民主主義が、占領政策に合致することを発見して喜んだ」<sup>25</sup>ことにより、GHQと「報徳同志」双方にとって好ましい状況が出現したといえる。

ともあれ、GHQのいわば公認を得て、報徳運動は戦後の運動に向かうこととなった。先述した機関誌『大日本報徳』の終戦号（1945年、第44巻第4号）から1949年10月号（第48巻、第10号）までを通覧しても、報徳運動が大日本報徳社を中心に活発に活動していたことが窺える。

なお、先述した加藤仁平は、東京高等師範学校から京都大学へ進み、小西重直のもとで日本教育史を修め、東京文理科大学に赴任した教育学者である。加藤は、研究者となってから、「静坐瞑目してわが行くべき道を念じた時、ふと念頭に浮かんできたのが「至誠と慈悲」ということであった」<sup>26</sup>という経験を期に尊徳研究の道に進み、戦前期には、『新興報徳教育』（1938年）などの書

物を著すなど、名実ともに報徳教育運動の指導者であった。また、教育運動のみならず、佐々井信太郎の薫陶を受けて、大日本報徳社による長期講習会の講師や朝鮮半島に赴いて報徳の指導を行うなど、積極的に報徳運動に取り組んだ。

このように「学業一致」を自任して臨んだ加藤は、1945年8月15日の「玉音放送」を受けると、「報徳推譲一円融合の立場に立って、世界平和の使徒になろう」との考えのもと、復員軍人に「報徳精神」を説いている。彼にとっても、報徳の原理は、時代の要請に応じて人々の生活に寄与する普遍性を持っていたものと考えられる。

しかし、加藤は1946年5月に公布された教職員追放令の適応を受け、翌年6月に東京文理科大学教授から「免官」されている。加藤に対する追放令の適応対象となった書物は、『三種の神器観より見たる日本精神史』（1939年）であった。これは、1928年に出版した『三種の神器観より見たる国民精神発達史』に「報徳的な一円融合生々発展史観で書き改めて出版した」ものである。加藤にとっては、報徳の解釈によって執筆した書物によって「公職追放」となることには到底納得できるはずもなく、大部の「再審査請求理由書」を提出した。それも受け入れられずに16年間勤めた東京文理科大学を去ることになったことに対し、加藤は次のように述べている<sup>27</sup>。

日華事変や、太平洋戦争とともに、国体明徴や国民精神文化の運動がおこってくると、世をあげて観念は空転して、右へ右へと、いくらでも言葉や文字の上で偏っていた。今、よみ返して見ると、私の著書にも、そうした影響はまぬがれなかった。お恥かしいことである。審査員諸氏が、私の立場の根本精神をつかまないうで、そこをついたのもムリはなかった。一半の責任は私にもあった。

加藤にとっての「根本精神」が報徳にあったことは言うまでもない。彼は公職追放後も、雑誌『報徳青年』や『民主報徳』の発行に尽力するなど、この後も一貫して報徳運動に深く関わり続けた。

このことは、井上章一のいうように、報徳の「ニュートラル」<sup>28</sup>な性格を示しているともとれよう。そして、学校教育の中に報徳を取り入れる教育を熱心に進めていた井上喜一郎もまた、新教

育の出発に際して上述した経緯によって勇気付けられていたのである。(武藤)

## 2、戦後福沢国民学校の実践構築

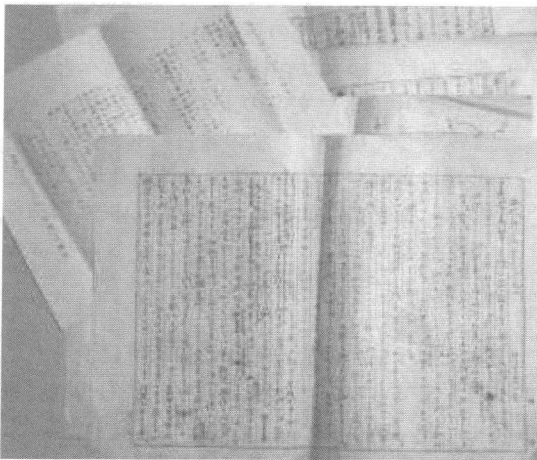
### (1)「空白の1946年度」に起こったこと

「はじめに」で述べたように、福沢校の『学校沿革誌』では1946年1月11日以降、井上喜一郎が校長に就任する1947年7月10日までの記録が欠落している。ここでは、可能な限りこの間の福沢国民学校(小学校)をめぐる状況について事実関係を確認していきたい。

#### ①新教育研究の開始と石山脩平の招聘

『農村地域社会学校』には、敗戦の混乱のなか「いくばくもなく、神奈川県の新教育研究の指定校として本校が指定された」とあり、「終戦の次の年、石山先生が指導においでになった。当時先生は新教育指針の執筆中であられた。われわれはなんとかしてしつかりした方向をつかみたいために先生のご指導をお願いした」と記されている<sup>29</sup>。この記述を時期的に特定しようとする際、第一に県からの研究指定はいつだったのか、そして第二に石山が「新教育指針の執筆中」だったのは「指導においでになった」ときなのか、それとも福沢から「ご指導をお願いした」ときなのか、という点で不明点が浮き上がってくる。

図2 講演原稿「本校における新教育の実際」



今回新たに発見された〔井上喜一郎文書〕所収の「本校に於ける新教育の実際」(図2)では、その冒頭に新教育研究に臨む際に感じた戸惑いが以下のように記されている<sup>30</sup>。

先づ第一に私達が新教育を研究するに当って、はたと直面した問題は、新教育に於ける理念と、今まで長くやってきた本校の報徳教育との関係如何でした。全く今までやってきたことを、草履の如く省みず、新しいものにとびつくのならば、又少しはやさしいことでしたとせうが、まだ新教育指針も出てゐず、進駐軍の占領方針の教育に於ける具体面もわからず、然も従来の教育を捨てまいとするには、その当時、随分考へました。

ここから1946年5月15日の『新教育指針』発行以前に、新教育への模索が開始、すなわち県からの研究指定がなされていたことがわかる。当時の校長・奥津重輝が1986年に著した家伝兼自伝『十左エ門三百年史』では、1946年4月1日とある<sup>31</sup>。両者を考え合わせれば、1946年度当初に新教育研究がスタートしたと考えて間違いないだろう。

第二点目に関して、〔井上喜一郎文書〕所収の福澤村国民学校教官井上喜一郎「児童自治と母子常会」に貴重な記録が残されている<sup>32</sup>。

先日教材研究課長になられました文理大教授の石山脩平先生をお頼みして自分の学校のやうな気になって指導していただき、昨年の六月より十回も来ていただきいろいろとお教へ願っております

敗戦後、国民学校令下での6月とは、1946年6月のみである。このとき、石山ははじめて「指導においでになった」と考えてよいだろう。これを手掛かりにすれば、「新教育指針の執筆中」だったのは「ご指導をお願いした」ときとなる。すなわち1946年5月15日より前、4月中か遅くとも5月上旬であると推定できる。

以上をまとめるならば、1946年4月初めに神奈川県から「新教育の研究指定」を受け、同4月から5月上旬に石山脩平への依頼があった。そして、6月以降、指導訪問が重ねられていったと考えられるのである。参考までに、石山脩平日記『留魂録』を確認したところ、石山自身が記した限りであるが1946年度中の福沢校への訪問指導は以下の通りであった<sup>33</sup>。

- ・1946年9月10日：十一時三十五分発にて福沢へ。三時より討議授業及学校常会を観る。
- ・1947年1月4日：村長も交へ職員と夕食
- ・1947年1月5日：職員五、六名に社会科について話す
- ・1947年1月29日：福沢行

## ②研究体制の確立

このように、石山脩平を招聘することで福沢校では研究体制を確立させていった。では、なぜ指導者として石山脩平の名が挙がったのだろうか。『農村地域社会学校』では、第一に「われわれはなんとかしてしつかりした方向をつかみたいために先生のご指導をお願いした」、すなわち福沢校側の意向、そして第二に「露木村長が、かつて文部省にいた関係上、頼みに行かれた」という当時の村長・露木良英の発意と行動が記載されている。

この点で、先に挙げた奥津校長の回顧は（時期的に錯誤があるものの）、その経緯と露木村長の強烈なリードが述べられており興味深い<sup>34</sup>。

県に対し講師者の派遣方を（中略）依頼したが、何やら派遣を逡巡しているような気配が感ぜられたので教頭井上喜一郎とも相談の結果、村長露木良英氏に事情を話して助勢を依頼した。村長は若い頃から足柄上郡書記として教育関係事務を担当。定年退職後村民の信頼厚く村長に推挙された人で、県学務課にも知人もあるだろうと思ったのであるが、村長は即座に直接文部省へ行こうと言われた。余りに突飛のように思えたので、再び教頭の意見を聞くと双手を挙げて村長との同行を励ましてくれた。

村長校長二人は連立って文部省を訪れ、督学官石山脩平先生に会って来意を告げると訝しそうに二人の顔を眺めながら、行きましようと言った。日時道順等委しく申上げて文部省を辞した。

これによれば、当初、奥津校長は県側に指導者を打診しており、特定の人物を指名していたわけではないようである。県側の「逡巡」（これ自体も一つの謎であるが）を見取った奥津校長は、郡・県教育行政に関わりの深かった露木村長に助勢を願い出た。これに対し露木村長から文部省行きが

提案され、「突飛のように思」いつつも、これに応じたというのである。ここから、福沢校側には当初明確に石山脩平の名が挙がっていたわけではなく、県側との調整に手間取る隙隙に、露木村長が石山脩平との接点をつないだという経緯が浮かび上がってくる。

この局面では露木村長のリードが大きかったとはいえ、福沢校側でも独自の研究計画のなかで石山を受け入れていったようである。〔井上喜一郎文書〕の中に、1946年度の「新教育研究計画」がある<sup>35</sup>。そこで「講師について」として「原論的 石山脩平 城戸幡太郎」、「実践家 成城 玉川 自由」と記載されており、石山脩平以外にも城戸幡太郎や大正期に新教育運動をリードした私立学校が挙げられていた。同メモには「新しい教育とは如何なる教育か。目的論の究明」や「学習法=方法 自学の形式をとり入れる」といった文言があり、原理的講話を石山や城戸に、「自学の形式」など実践的講話を私立学校の教員に期待していたことが窺える。実際、〔井上喜一郎文書〕の「本校に於ける新教育の実際」には、「学習は何を言っても子供自身の学ぶこと自体を本とする立場より、去年の七月頃から玉川や成城の自学の方法を研究しました」<sup>36</sup>という記載があり、この計画に基づき研究が展開されていたことがわかる。

このように、1946年度の福沢国民学校は、露木村長の行動力で原論的指導者に石山脩平を得、一方で私立学校の「自学」実践の成果に学ぶ研究体制をとっていたようである。

## ③「新教育研究報告会」の年月日

以上までの検討を踏まえ、先行研究の事実誤認を指摘しておきたい。それは、『農村地域社会学校』で「昭和二十一年二月二十六日」と記され、1960（昭和35）年の福沢小学校『創立六十年戦後教育研究十五年』では「昭和二一・二・六」と記されてきた「新教育研究報告会」である<sup>37</sup>。特に後者は、その後の先行研究でも典拠にされることが多く、石山脩平が最初に福沢校に来た時という誤認の原因になっている。

本稿が検討してきたように、福沢校における新教育研究が開始されたのは1946年4月以降であり、石山脩平が最初に福沢校に来たのは同年6月とみられる。つまり「新教育研究報告会」が2月

に行われたのならば、1947年2月と考えるべきなのである。『農村地域社会学校』が「昭和二十一年二月二十六日」の「新教育研究報告会」において実施した研究授業一覧」では、「高二 井上」が「インフレはどうして防げるか（十時）」の授業をしたことが紹介されている。これに対し、〔井上喜一郎文書〕の「高等科第二学年男女組社会科学習指導案 指導者 井上喜一郎」（図3）は題材が「インフレはどうして防げるか」であり、日付は「昭和二十二年二月二十六日」であった。これらを重ね合わせるならば、『農村地域社会学校』の記載が年を誤っており、「新教育研究報告会」は1947年2月26日であったと考えて間違いないだろう。念のために付言すれば、『創立六十年戦後教育研究十五年』の記載は、年に加え、26日を6日と書き誤る二重の誤りがあったと考えられるのである。

図3 「指導案」（全2枚）



#### ④新教育研究から社会科研究へ

『農村地域社会学校』によれば、1946年度中には「①終戦後の悩み」から、「②社会科研究以前の基盤」、さらには「③社会科研究第一期（問題単元学習期）」へと進んでいったことが読み取れる。新教育から社会科への移行はどのように進んだのだろうか。

当時の校長・奥津重輝は、石山脩平がある時「何等の予告もなく」、「数名の所謂少壮の高級文部官僚？を引き連れて」来校し、全校の授業参観をしたのち「文部省としては教科として社会科創設の意図を有し」、福沢校に「その最初の実践校として、昭和二二年度内に日本全国に公開し、教育の新体制を樹立したいので全職員の協力をお願いしたいと発表」された日のことを回顧している<sup>38</sup>。これ

がいつのことなのか日時が特定できないものの、以後、自ら公開授業を申し出る者、二日分の食糧を持参し夜も帰らず研究に没頭する者、校長の論理に矛盾ありと追求する者など、「全校一致の精進は涙ぐましい程」の研究が展開されたという<sup>39</sup>。このなかには1947年度（7月10日の奥津校長退職まで）の出来事が含まれている可能性があるものの、石山脩平による社会科の全国公開の依頼により、福沢国民学校内により一層の研究熱が吹き込まれたことは確かである。

奥津校長の子息・杉田真は1946年当時を以下のように回顧している<sup>40</sup>。

私は昭和二一年ごろ、師範学校にいたんですけど、とにかくおやじがすごく燃えてましてね。今の教育を捨てて新しい教育、でっけえことを始めんだ福沢でと。（中略）で、社会科というやつなんだよと言うんですよ。（中略）じゃ福沢へ行って勉強させてもらおうと。（中略）とにかく、何か先生方が非常にまとまって、私も一週間いったのですけれど、何か燃えてましたな、学校がね。

「新しい教育」である「社会科」に、教員が研究意欲を燃やす点に、奥津校長の回顧との整合性を読み取ることができる。福沢国民学校の「空白の1946年度」は、それまでの「終戦後の悩み」から新教育研究を経て、1947年度の全国公開を見据えた「社会科研究第一期」へと移行する一大転機であったといえる。（須田）

#### (2) 実践構築の経緯

福沢国民学校は、先述の通り、1946年に神奈川県から新教育研究の指定校に指定され、そのための指導に請われて来校したのが、石山脩平であった。その後、石山を通じて重松鷹泰や和歌森太郎、上田薫らも指導に参加し、表2に見られるような研究が取り組まれた。これは大まかな「見取り図」であるが、本研究の主な対象は、「はじめに」で述べたように終戦直後から1946年度としているため、ここでは、当時福沢国民学校（小学校）に勤務した教員の回想から、終戦直後の学校の様子や、新教育に向けた教員の見解などを辿ってみたい。

以下は、1938（昭和13）年から1961（昭和



表1 「福沢プラン」関係年表（『農村地域社会学校』刊行まで）

年	事項（月日）（「」は研究発表題目）	備考
1945（昭和20）	終戦大詔喚発され、全職員講堂で放送をきく（8.15）	校長奥津重輝
1946（昭和21）	御真影奉還（2.9） 〔神奈川県より、新教育研究の指定を受ける（4月）〕 〔石山脩平に「社会科」指導を依頼（4～5月）〕 〔石山脩平による指導訪問（6月）〕 自由研究「社会部」発足（10.10）	
1947（昭和22）	新教育研究報告会（2.26）講演：石山脩平（東京文理大）、重松鷹泰（文部事務官） 六・三制はじまる。福沢村立福沢小学校と改称（4.1） 井上喜一郎、11代校長に就任（7.10～1963.8.31） 文部省重松鷹泰講師による社会科研究会（7.26） 石山脩平講師による校内研究会（9.23） 社会科研究発表会（10.23～24）「社会科作業単元、教科課程表、社会科調書について」 講演：石山脩平、重松鷹泰、和歌森太郎（東京文理大）濱田陽太郎（東京文理大の社会調査発表）	※第一期、第二期 ※第三期 約850名の参観
1948（昭和23）	井上校長、文部省社会科編集委員に任命され、1951、1955、1959年版社会科改訂にあたり文部省教材等調査委員を務める 東京都新教育研究会員が、斑目、母子（おやこ）常会を参観（2.22） 石山脩平講師による校内研究会（5.22） 生活カリキュラム研究発表大会（10.21～22）「生活カリキュラム構成」 講演：石山脩平、長坂端午（文部事務官）	※第四期 参観約1000名
1949（昭和24）	PTA 結成総会開催（5月） 長坂端午を講師とする授業法研究会（9月） 生活カリキュラム研究発表大会（10.20～21）「生活カリキュラムの構成と要素表」「生活カリキュラムの運営」講演：石山脩平、長坂端午 県教育委員会より新教育推進に対して表彰（11.3）	※第五期 参観約1000名
1950（昭和25）	地域社会の調査を行う（3月） 長坂端午講師による校内研究会（7.4） 石山脩平講師による校内研究会（8.4） 横浜国大鈴木清教授による「個人差を重んずる指導」講演会（12.1）	第六期
1951（昭和26）	個人差を重んずる指導研究会（1.20）（中村隆秋。山口一夫両指導主事の講演） 新教育研究実施五カ年研究発表会（2.19～20） 「農村児童の性格形成」「社会科のあゆみについて」「福沢村実態調査報告（濱田陽太郎）」ほか 講演：石山脩平、長坂端午、重松鷹泰 『農村地域社会科学校』発行（2.25） 長坂端午講師による校内研究会（7.7） 創立50周年記念式典、新校歌制定（石山脩平作詞）（10.9）	

（註）石山脩平指導・福沢所学校『農村地域社会学校』（金子書房、1951年）、神奈川県南足柄町立福沢小学校『創立六十年戦後教育研究十五年』（神奈川県騰写堂、1960年10月）、福沢小学校『道ひとすじに一井上喜一郎先生を送る記念誌一』（福沢小学校、1963年）、神奈川県南足柄町立福沢小学校『開校百周年記念誌』（福沢小学校、2001年）をもとに作成。

36)年まで、23年間に渡り福沢小学校(国民学校)に勤務した加藤フク氏から、筆者(武藤)が2006年8月18日に行った聞き取りの内容である。加藤氏は、小学校卒業後に女学校に進学し、その後師範学校の二部で1年間学んだ後、17歳という「最短距離」で教員となった人物であり、在職もほぼ井上喜一郎と同じで、戦前戦後をまたいでいる。なお、聞き手の「一寸木」とは、聞き取りの際に同席していただいた福沢小学校教頭(当時)の一寸木肇氏のことである。やや長くなるが、戦中から終戦直後の様子を窺える内容となっているため、ここに掲載したい。

### ①戦争末期から終戦時の状況

加藤：私は今でもよく覚えているのだけれど、8月15日の天皇陛下のあの言葉には、本当に何と言って良いか分からない、がっかりしましたね。ちょうどあの時は、奥津校長さんだったんです。それで、「今日、重大な話があるから、先生方は皆講堂に集まって下さい。」と。それで、「何だろう？何だろう？」とって先生方集まったんです。そうしたら玉音放送でしょ？もう本当がっかりしちゃいましたね。何の言葉も出なかったね、皆。どうしていいかわからなかったね。

武藤：ではそのときの放送で、負けたということが分かったわけですね？

加藤：そう。負けるなんてその頃誰も考えてなかったでしょう？みんな勝つものと思っていたから、勝つまではどんなに苦しいことがあっても我慢するというので一生懸命張り切っていたのに、ペしゃんとなっちゃったから。あのときは、がっかりしたというか、あの感じというのは、忘れられませんね。いろいろありますね、長生きしていると。

武藤：当時は授業は一時中断されていたわけですよ？

加藤：そうですね。教科書もないし。みんな向こうから通知が来て、使っていたものはみんな整理してしまえという事で、掛け軸から何でも。

武藤：向こうというのは文部省ですか？

加藤：そう。今までの地理の掛図とか、歴史のとか。全部整理したんです。中には惜しいからといって教壇の中に隠したり、千津島の民家の家へ持って行ってもらったり、使っていた道具も、

昔ですから薙刀のものとかも、鉄かぶともそういうのを全部整理しちゃった。それで、教科書も使っちゃいけないというので、やりようがなくて。それで、そのうちに教科書へ線を引かせて、これだけ(墨塗り)はやっても良いということだったですね。何かやったんでしょうね。学校が休校ということはなかったですから。あの時は奥津先生…。そうだ、六・三制になったから、中学の校舎がその当時まだなかったから、はじめは福沢に中学生もいたんです。何をしていたのか…。やっぱり勉強していたのじゃないか…。よく覚えていませんが。もう、井上校長が新しい教育をやるというので、そっちへ行ったという記憶の方が強いんですね。終わってすぐですから。一番早く始めたわけですからね。

武藤：その後、日本の教育は、「教え子を再び戦場へ送るな」ということで、それまでの教育を批判していくわけですが、戦中は立派な少国民としての教育をしていたのを、180度転換する事に対する葛藤といいますか、加藤先生はそういう精神的な印象をお持ちですか？

加藤：それはありましたよ。考えようによっては「せんはん」ですよ私は。戦争犯罪人ですよ。一生懸命に戦争をしろ、まあ戦争をしろというほどでもないですけど、富国強兵の教育をやってきたわけでしょ？それで今度は違うでしょう？本当からしたら私なんかは戦前戦後(教員を)やるっていうのは、間違っている。「せんはん」が教育をしていたというような感じですね、考えてみれば。

武藤：しかし当時の人はみな必死だったわけですよ。自分がどのように考えたらよいかとか、あまりそういう余裕も無かったのではないかとと思うのですが。

加藤：あまりにも変わり方が激しすぎて、戸惑いより他なかったですね。(中略)

それで、本当だったら私などはそこで先生をしていられないはずだった、辞めなければならぬ立場だったんですけど、図々しく新しい教育に入ってしまったわけですけどね。そういう意味では、本当に180度の転換でした。考えられないですね。でもね、今私が考えて、今の民主教育のほうが、国民の人々にとって、良いのじゃないかなということを感じます。みんなが幸せになっているということは、事実ですね。

あの時分と今と比べてみてね。色々問題点も出てきましたけれど、大まかに考えて、やっぱり民主教育はいいな、と。私達は「戦争はいけない」と思っていますけれど、それと一緒に、戦死した人に対する、申し訳なかった、感謝の気持ちですね、それは強いですね。本当に、今でも、そういう兵隊さん方のために今日があるんで、私達は、平和な、楽な、幸せな暮らしが出来ているんだ、と。本当に、兵隊さん申し訳ないという、そういう気持ちは強いですね。

一寸木：二宮金次郎の銅像は、米山先生の前からあったのですか？

加藤：そうです。もっと前からあったんです。あれは福沢だけではなくて、足柄上郡全体で二宮先生の教育を取入れた、だから上郡の学校には全部あったと思います。ずっとあったのだけれど、戦争で出征されてしまって。ウチ（福沢小）は出さなかったですけど。今は丸太の森に置いてありますね。

一寸木：供出はしなかったのですか？

加藤：供出はしなかったですね。ウチのは残ってたんですね。どういうわけか。

武藤：加藤先生は、福沢小学校の後はどちらに行かれたんですか？

加藤：福沢でおしまいにしました。

## ②戦後新教育

加藤：福沢小学校自体が、「農村地域社会学校における福沢小学校の教育」ということですから、地域と一体になって動くんですね。地域の問題を解決しなければ、子どもだけ学校へやってもダメだという校長先生の考えで。本当に今考えると一体でしたね。村長さんも学校へしょっちゅうこられるし。そして、お話をしていかれたり。本当に地域と学校とが一体だったような気がします。それで、小澤校長先生の次が、奥津校長先生。奥津先生はあまり長くやられなかったです。1年か2年でやめられて、その後、井上喜一郎先生がずっとやられたんです。この先生はまあ偉い先生で。身体が弱くていられたものですから、休職していらして、はじめ福沢においでになった時なども、学校を休まれたり帰省していらして、そんなに健康ではなかったんです。ところがすっかり健康になられて、一生懸命で戦後の教育に没頭されたんです。井上

先生は偉大なる校長先生でしょうね。

武藤：井上先生を中心とするいわゆる「福沢プラン」が行われる時に、福沢小学校の先生方は、ほとんど戦前戦中の福沢小学校からそのまま引き継がれたのですか？

加藤：そうでもないです。かなり入れ替わりがあります。校長さんはかわられなかったですが、先生ではかなり移動があります。中には出て行ってしまう人もいるし、中には校長先生が目を付けて、優秀な先生を集めてくるとか、そういうこともあって、かなり入れ替わっています。

武藤：では、加藤先生は福沢小学校ではベテランの先生でいらっしゃるのですか？

加藤：私は女ですから遠くへ行かれないし、長くいたというだけ。ただ長くいた分、福沢小学校の歴史はよく分かるわけです。しかし、先生方が気をそろえて、校長さんを中心に、時間なんて超越してやりましたね。時間なんか考えたら、何時に帰るなんて考えたら出来ないです。石山先生自体がおいでになるのが8時頃ですから。それから先生方集まって、石山先生のお話を聞いたり、研究するのですから、皆さんがそういうつもりになっちゃってるんですね。先生方がね。やはりそこは校長先生の偉きさんでしょうね。文句なんて言う人いないし。みんなでやりました。でも大変でしたね。

(中略)

何しろ「勤労」というのは、二宮先生の教えが流れていたのでしょうね。その上に「新教育」というものがあって、はじめのうちは全然違うものかなと思ったんですけど、そうじゃなくて、二宮先生の報徳教育も、民主主義教育も、同じようなもので、二宮先生自体が、民主主義者ですよ。みんなに同じように分けてやって、困った人を助けていくという。その二宮先生の考え方と「新教育」が同じような。しかし、二宮先生という人は、ずいぶん偉い先生だなと思いますね。だって、小さい時、酒匂川が流れちゃうでしょ？そうすると皆が工事に来ますね。すると自分は小さいからと言って、わらじを作って皆にサービスして。というような話がいろいろありますけれど、本当に、考えてみると、はじめはちょっと違うのかなと思いましたが、そうではなくて、やはり二宮先生の報徳教育と民主教育とは、共通する面が非常に大きいよう

に感じます。

武藤：石山（脩平）先生は二宮先生について何か語られていましたか？

加藤：石山先生の時は、社会科のお話を伺わなければいけないということで、先生は社会科の方を主にして下さったんです。その時分は何も、社会科の指導要領も全然無かったでしょ？それで、石山先生にお願いして、「もと」を聞いて、少しずつ分からないながら。ウチの方も最初は社会科なんて言ったって何をやっていいかわからないから、社会科主任の先生も何をやっていいかわからない。何もないですから。目標にするものが何もないでしょ？で、しょうがないから、当時は、新聞の切抜きを持ってきて、それを中心に皆で討議するとか、そんなことから始めたんです。で、だんだんと石山先生のお話を聞いて、少しずつ社会科の勉強をしていったんですけど。そのときにちょうど、名古屋の重松先生とか、東京の長坂端午先生とかに来ていただいて、福沢でやっているよというので、それを調べて、ご自分で指導要領的なものを作られたんですね。それで、福沢がもとだというので、方々の学校から先生方が福沢へ参観に来られるようになったんです。本当にあの時は、何も、何もないですからね。文部省の指針もないし、何をしたいか。何がなんだか分からない。それで非常に困りましたね。

武藤：それまでは国史とか地理とか修身があったわけですね。それがなくなって社会科になった。でも、その中でやるのは国史でもなければ地理でもなく、修身でもない。

加藤：昔は、「今日は、この時間は、これだけを生徒に指導しましょう」というので教案を作ってやって、と決まっていたわけでしょ？ところが社会科というのはそういうものはないでしょ？これだけやってこう、というのがその時は分からなかったわけですね。どうしていいか。何をしたいか。本当に困りましたね。

一寸木：今の総合学習ですね。

武藤：もちろん教科書もないですね。

加藤：もちろんないです。だから校長さんを中心に話し合っ、指導の先生の指導を受けて、少しずつ少しずつやっていったということですね。

何しろ井上校長さんという人は、とても努力家

で、頭も良いし勉強家でしたね。それで子どもを見て、これから社会科をやっていくには、考える子どもを作らなくちゃならない、考えるにはどういう過程で考えていくか、とか、どういう場を作ったら、子供の思考を伸ばすことが出来るか、とか、そういうことを盛んにやられました。「考える力を伸ばす」ということには、ずいぶん力を入れられましたね。で、考えて判断する、それが生きる力になるでしょうけれど、考えるといっても、物事に関心を持たなければいけないですね。考えるもとを作るにはその契機がなくちゃいけない。契機を作らないと、そういうものが出てこないということもありますね。そういうところを盛んに研究されて、実践して、そのあと反省をして、反省をするとその後やらなきゃいけないということがまた出てくるわけですね。それを今度は取り上げて、次のテーマにしてやるという。こういう感じですよ。（ご自宅の資料を取り出す）

一寸木：これは貴重な資料ですね。

武藤：このような冊子を作られるのも大変だったのではないですか？日々のお仕事もあったわけですよ。

加藤：大変ですよ。家でやるんです。夜。子どもの作文の添削なんかも学校じゃ出来ませんからみんな家へ持ってきてやるんです。こういう冊子も夜です。昔は夜、皆が寝静まった後に火鉢を横において、原稿を書いたもんです。学校でなんか書いている暇ないですから。この原稿は皆家で書いたんです。

以上の回想から、本研究の課題に照らした時、注目すべき点として以下の5点が指摘できよう。一点目は、「終戦の詔」を学校で聞き、「がっくり」し、「どうしていいかわからな」といって衝撃とともに受け止められたことである。そして戦中から戦後にかけて教員であり続けた自らを「せんはん」と位置付けながら新教育に臨んだという葛藤は、加藤氏だけのものではないと考えられる。しかし、後に新教育の研究指定を受け、井上喜一郎を中心として「福沢プラン」に取り組む際には、「出て行ってしまふ人もい」たり、「校長先生が目をつけて、優秀な先生を集めて」きたりして、「かなり入れ替わりがあ」ったことは、興味深い点である。

二点目は、「地域の問題を解決しなければ、子

どもだけ学校へやってもダメだという校長の考え」や、「村長さんも学校へしょっちゅうこられるし」といった部分からも窺えるように、「農村地域社会学校」としての新教育を強く意識していた点である。このことは、石山脩平を招く契機ともなった露木村長と福沢小学校（井上喜一郎ら）との深い関わりを裏付けるものであるとともに、戦前の報徳教育との継続が色濃く示されている。

三点目は、「新教育」と報徳教育との関わりを強く意識していることである。新教育と報徳は、「はじめのうちは全然違うものかなと思っていたのですが、そうじゃなくて、二宮先生の報徳教育も、民主主義教育も、同じようなもので、二宮先生自体が、民主主義者ですよ。」とあるように、加藤氏の認識も、後述する井上喜一郎の影響を強く受けたとも考えられるが、戦時教育に携わったことを「せんはん」として省みつつも、報徳教育はなお再評価して取り組んだ姿勢を示している。

四点目に、「新教育」研究に取り組む際の福沢小学校（国民学校）内における研究熱の高さである。「子どもの作文の添削」や原稿執筆を夜行う、「本当に忙しかった」状況の中で、教員が一丸となって取り組んだ様子は、先述した奥津校長の回顧とも合致するものである。

五点目は、石山脩平との関わりである。加藤氏の記憶では、指導要領もない段階から「社会科」を研究することとなったが、「社会科主任の先生も何をやっていいかわからない」状況で、石山に社会科の「もと」を聞いて、少しずつ勉強をした、とある。教科としての社会科については、石山の教授に負うところが大きかったものと考えられる。（武藤）

### 3、報徳教育から新教育への「転回」

#### (1) 報徳教育と新教育との対比

井上喜一郎は、1938年度に福沢校に赴任以来、報徳教育の実践に取り組み、1945年4月に赴任した奥津重輝校長の信望も厚く、1946年3月に教頭、1947年7月の奥津校長退任に際し校長に任じられている。報徳教育から『農村地域社会学校』への転回に際し、その要となった人物である。

井上は、新教育に臨む際に感じた戸惑いを、草稿メモ「新教育と報徳教育」（図1）のなかで以下のように記している<sup>41</sup>。

アメリカの民主主義哲学を持ってやれば問題ない。然し日本的に然も報徳教育をやってきた立場から考へてみると苦悶がある。現実の中から新しいものを生みださんと悩む。

民主主義の哲学と報徳哲学と言ふものを考へる。

直輸入的にアメリカの民主教育実践へと転ずる事をためらった井上の念頭には、「常会が児童の日常生活指導を志向し、教員と保護者とが密接な連携関係を構築する方向に機能していた」<sup>42</sup>という戦前以来の蓄積があり、しかも教育実践者として一定の手ごたえ感じ、捨てがたいものと評価する心情があったのだろう。それゆえ、「実践の中から新しいものを生みださん」ことを願い、そこから民主主義の哲学と報徳哲学を対比する思索へと進んでいったと考えられる。

表2 デューイ哲学と報徳哲学の対比

デューイの哲学	報徳哲学
過去の経験を土台として未来の経験を導かうとする。過去の経験を用ひて指導の経験を変改し形成しようとする。この故に智性は創造的である構成的である。創造的智性の高調が彼の哲学の本領である。	宇宙は大抵一元より発達し天壤無窮へと生々発展するのであるが、その一元一元の全体は一貫の理法によって輪廻し、無限に発展する。神儒仏三味一粒丸と言はれる言葉には大きな発展変容性をもつ固定的なものでない。戦時的には戦時的の意味づけがなされた。今や新しい意味を与へる時がきた＝報徳はもともとさういふものである。

（註）井上喜一郎「新教育と報徳教育」〔井上喜一郎文書〕。

その結果、井上は一つの結論を見出す<sup>43</sup>。

結論を先に言へば、民主主義の哲学とは報徳とは矛盾あるものを持っていない＝二割の封建的、アメリカ的なものを除けば似ている。但し発達の過程が全く違ふ。

さらに一段と深いものを報徳は持っている。「民主教育とは」アメリカでも決定的でない。決定的でない所に特長がある。動いている。進歩的である。プログレッシブ。どれがよいときめていない。

井上が着目したのは、アメリカの進歩主義教育

論者・デューイの哲学であった。表2にあるように、井上はそこから創造的・構成的な教育の在り様を見出し、それを報徳哲学が説く「発展変容性」と同様だと考えた。さらには両者が「行動の哲学」である点にも類似性を見出し、民主教育も報徳教育も「創造教育である」と考えたのであった<sup>44</sup>。

また、井上は「新教育」の目標として「個性の完成」、「自発性の原理」を挙げ、それぞれ報徳教育の目標と対比しつつ論じていく。まず「個性の完成」については、報徳教育で論じられてきた「親心をもって児童の徳を愛撫育成し、この子のもつ長所美点を延す」という考え方を引き合いに出し、「個性教育を狙ひ、人間を尊重し、無生物にもその個性的長所を認める点でずいぶん徹底している」と述べている<sup>45</sup>。報徳には「天地人三才の徳」と言い、あらゆる事物に「徳」=性質・特性・個性を見出す考え方がある。戦前の福沢国民学校では「児童の個性は天分によつて夫々特徴を有し(中略)その長所美点を親心を以て愛撫育成して各々其の長所美点を以て一円融合生々発展、皇運を扶翼し奉る国民を養成するのが報徳教育である」<sup>46</sup>と論じていた。井上の主張は、末尾の「皇運を扶翼し奉る」を削除すれば、個性尊重の原理が残るのではないかという主張といえる。

「自発性の原理」についても、「荒地は荒地の力で立上るとか、貧乏は貧乏の力で立上るとか、劣等生は劣等生自身の手で延すとか、報徳ほど自発性の原理を強調してゐるものはないと思ひます」<sup>47</sup>と述べ、報徳の考え方こそ、これを重視しているのだと述べている。

井上は「新教育」をデューイ哲学に依って創造的・構成的な行動哲学と解釈し、また個性や自発性を尊重する教育と捉えていた。そして、報徳哲学や報徳教育との対比により、両者が類似のもの、あわよくば報徳が既に高いレベルで論じているとさえ考えたのであった。だが表2で「戦時的には戦時的の意味づけがなされた」とあるように、井上は戦前の報徳教育を「戦時的」と退けてもいる。「新教育と報徳教育」では、「報徳教育の考ふべき所」として、以下の4点を挙げていた<sup>48</sup>。

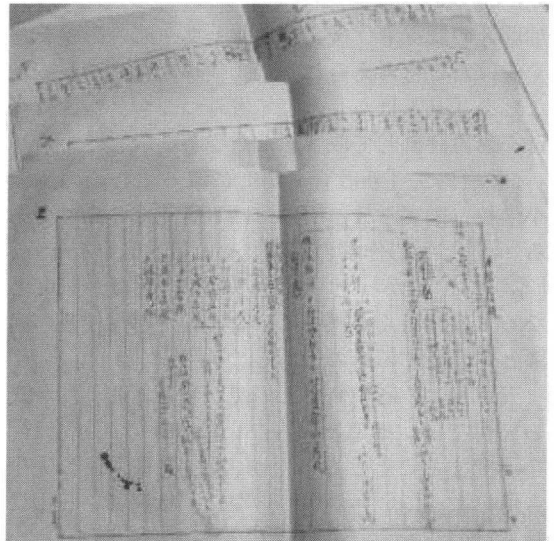
恩をおし売するな=自主的報恩感謝  
 自発性をそこなふな=上からの圧迫  
 形式にとらはれるな=生々としたものを  
 与へよ

新しいものを包容せよ—元来がさうした  
 ものだ

これによれば、戦前の報徳教育は恩を押し売りし、上からの圧迫により自発性を損ない、形式的で排除的なものとして機能した実践ということになる。井上はこれを否定し、「元来がさうしたもの」であった報徳の姿、すなわち「戦時色」を払拭した報徳教育の在り方を再考することで「新教育」への転回を図ろうとしていたことがわかる。

## (2)「本校の新教育の底流を流れる原理的なもの」

図4 講演原稿「本校の目標」



〔井上喜一郎文書〕中の「本校の目標」と「本校に於ける新教育の実際」を合わせると、「健康の原理」を除く7つの観点の詳細を捉えることができる。以下、やや引用が主となるが、先行研究の空白を埋める意味も含め紹介していきたい。

### ①発展の原理

発展の原理には3つの原案があり、推敲が重ねられたことが窺える。ここでは、最も内容的に整理されていると考えられる「本校の目標」中の案を紹介する。

発展の原理は、前節で取り上げたデューイ哲学との対比をもとに、民主教育も報徳教育も発展的であり可変的なものだという認識をもとに、大前提が以下のように述べられている<sup>49</sup>。

過去の日本の教育が型にはめる教育であったことを考へ、大きな転換であると思ひます。(中略)

こうした所から新日本教育の理念として「現実の中より新しき内容原理を発見してゆく方法そのものを教育といふ」

「創造そのものを与へることが新教育の理念である」

といふことが理解されると思ふ。

本校の新教育研究も一定の型にはめようと努力してゐるのでなく、悩みつつ教育営為をつづけて限りなき進歩を考へて精進してゐるものであります。

これに応じて第一に教室の姿、第二に机の並べ方、第三に自由研究についての具体例が挙げられている。

まず、教室に姿について、教室の前面に「級約」が掲げられているのだが、それは「昨今までのやうに一つの型をして児童より離れて教師の独善に陥つてしまふことを避けて子供の毎日の生活に密接に結びつき、生き生きとした目あて」を心が手ているという。そのため、文言は「子供達自身が反省して学級常会などできめてよくなったりどんどん自分達の手で変へてゆく」ようにするのだという。

こうした可變的な運用は、机の並べ方にも反映される。

本校では新教育本来の考へ方から言へば個別学習が本体だが、人材の関係でさうもいかない。結局、個別と一斉との中間である協同学習が勢ひ多くならざるを得ないので、さうした机の並べ方が多くなつてゐるのであつて、原則から言へば、常に学習の必要上から変化すべきものであつて、それは学習能率の上から考へなければならぬものであると思ふ。

そして、1946年度に開始された自由研究にもまた、可變的で發展的な原理が生かされているのだという。その仕組みは、「低学年（三年以下）の自由研究と四年以上の自由研究、各学級での自由研究と三段」を設けたことにあるという。

三年以下の自由研究は、週2時間、教科学習の

補習として運用する。四年以上は週4時間で「月曜日に、理科学習部、音楽部、裁縫部、水曜日には図画部、工作部、社会研究部、文芸部となり、各児童は一人で二科目宛」に取り組むという。これに対し、各学級での自由研究は「主として理智的な学級独自の程度にあつた研究を狙つてゐます」と述べられているが、それまで放課後に行われていた学校常会や学級常会を「この時間に正課としてなされることは新教育のよい所だと思ひます」とも述べられており、学級活動の一環として弾力的な運用がされていたことがわかる。

## ②個性の原理

個性の原理は、主として教員の児童観の問題として語られている。「本校に於ける新教育の実際」に二つの案があるが、その要点と考えられる点を紹介したい。まず端的かつやや独特な言い回しで、教師の心構えが述べられている。

児童の中に人間のよさをみつけることが教師の使命であると思ふ。児童は敏感である。自己を喜んでくれる教師については明るく伸び伸びと、新教育の目指す児童の姿に伸びると思ふ。天皇も偉いがルンペンも偉い先生も偉いんだが、子供も偉いんだ、まこととまことの接触であり、そこには屈従がないものでなくてはならぬ。

天皇から子供に至るまで、屈従のない「まこととまことの接触」を理想として掲げている。そして、それは既に従来の報徳教育で論じられていたとして、以下のように述べている<sup>50</sup>。

従来の報徳教育で「親心を以て児童の徳の愛撫育成する」といふことを言ってきたが、この言葉を単なる言葉でなく実践する時だと思ふ。「この鼻たらし小僧が」といふやうな考へからは、ほんとの新教育は決して生れない。さうしてこうした考へは、学校全体にはうはいとして先生と生徒、生徒同士、男生と女生との間に漲つてこなければならぬと思ふ。(中略)私は長年の間の経験で、うんとピンタをはる、子供を子どもとして尊ばない先生の受持の級の子供は不思議にも上級生になると下級生に平気でどんどんピンタをはる

といふことを見ておそろしいことだと感じてゐます。この学校で常会に於て又朝会に於て他人のよい所をみつけて誉めることは、このお互い同士のよさをみつけやがて友人の人格を尊重する学校全体の雰囲気を作つてゐると自負しております。(中略) どんなこどもの中にもよさをみつけることが大切だと思ふ。その一つよさを機縁としてその人全体を尊ぶことになると思ふ。さうして学校でやつてゐるこの人格尊重の気風が村の婦人会にうつり、家庭にうつり、村全体の空気となることを念願しております。

「親心を以て児童の徳の愛撫育成する」を真に言葉通り実践できるのか、という厳しい自問が投げかけられている。ここに「戦時的」な姿からの脱却が志向されている。井上は、戦前以来継続してきた常会での「感心な人の発表」が、これを実践する鍵になり、やがては「村全体の空気となる」ことを願っている。ここに、戦前以来の母子常会<sup>51</sup>が『農村地域社会学校』形成の重要な一局面となつていく発端を見出すことができる。

### ③社会性の原理

報徳教育から『農村地域社会学校』形成へという視点で福沢校の歩みを見ると、「個性の原理」と同様に重要な意味を有するのは、他者や地域社会とのつながりを論じる「社会性の原理」だと考えられる。この点に関して、井上は民主教育と報徳教育の考え方を対比させつつ論じている。

新しい教育に於ては個と全体と言ふものとのつながりが大切である。人間を人間として尊ぶ反面に規律秩序奉仕をお互いになすことによつて又個人がたつと考へるのが民主主義の立場である。問題は、その社会連帯意識が個性の内容からもり上がることが大切である。(中略) 殊に本校の根底に流れゐるものに、譲、推譲の精神がある。「人のためにつくす」ことです。人のためになることが人間の存在の意義がある人間存在の社会性があるとするものです。(中略)

本校では譲の出発点としほめることを考へてゐる。お互同志よい所をみつけてほめておくここに譲の精神が深くなってゆくと見方を

とつてゐる。

ここに、社会性の原理が「社会連帯意識」という言葉、さらには「人のためにつくす」という言葉に噛み砕かれ、そこから報徳思想の「推譲」が引き合いに出されるという論理展開が読み取れる。実際場面で「ほめること」が挙げられているが、これは「個性の原理」で引用されたのと同様に常会における「感心な人の発表」を念頭に置いたものである。常会は「社会性の原理」を具現する方策としても意義付けられていたことがわかる。

一方で、井上は「推譲」を教育活動に取入れる意義を、独自の視点で論じていく。

子供は元来個人主義的なものである。それに対して譲を強いることは不自然とも言へる。さうして偽善だとも考へられ易い。事実私達としても人のためにつくすことに対して十全になし得ないうしろめたさを感じず。それが「推譲か、アハ…」と笑ふ言葉となつてゐたのだと思ふ。(中略) 然し、人として人のためにつくすことはむづかしいと言ふ人間としての未完成だけは意識させる。さうして、人のためにつくし得る人にならんと努力をさせる。ここに理想主義的な考え方の指導の意義があると思ふ。(中略)

本校ではかうした見地から譲の精神を宗教教育の基盤を置きたいと考へている。

元来、報徳には「心田の開発」を重視し、精神修養を伴う考え方がある。井上は、「推譲」の教えを学校教育における宗教教育として位置付けようとまで考へていたのである。そこには報徳教育の発展をもつて「新教育」を推進しようとの意図さえ窺うことができる。

これとは別に、地域社会とのつながりについても論じられている。そこには「社会科」が持ち出されており、石山脩平の指導の影響を読み取ることができる。

真実の今後の教育は、社会に規定せられながら進んで社会を規定し、社会の改革に関与するものでなければならぬと思ふ。ここに社会科の重要な出現の意義が一面あるので



はないかと思ふ

当時の井上（福沢校）にとって「社会性の原理」とは、「人のためにつくす」という教育目標、そして実社会との連携という方法論にまでわたる幅広い概念として考えられていた。それが、戦前以来の「感心な人の発表」や「推譲」、そして新たに登場した「社会科」までも包摂し、これらを同一線上に並べて考える得る基盤を提供したと考えられる。

#### ④自発性の原理

井上は「児童は外界の刺激に対し順応する。先生威圧の態度より（中略）ちぢこまった姿をとる。（中略）その心の習慣の姿が、黙りこくってゐる児童の姿であり、それは従来の教育の弊のあらはれ」だと論じる。井上は「本校の目標」の最後に「例話」と題するメモ書きをしているが、その中でも「新しい教育は許す教育であり古い軍国的教育は許さざる教育」として、以下のように述べている。

子供の過失を許し、之を大きな心でよい方に伸していこうとする親心が、子供の心に浸みこむ時に、ほんとに子供は生き生きとした人間としての自発活動をすると思ふ。さうしてこの寛容は子供達同志の間にもその心掛をつくるのが民主教育には是非必要だと思ふ。

ここから、井上が「新教育」への転回に際し、従来の軍国的教育で常態化していた教員の威圧的な態度を改め、「子どもの過失を許し」、「自発活動」を促そうと考えていたことがわかる。

そのための具体策として、「教師と児童との心の垣根をはずす」こと、「児童の興味（インタレスト）関與がどこにあるかをみる」こと、「子供の生活の必要性を考へること」、「子供が困難なることに打打ち、それに成功した喜びを味はせ自発的活動を促す」ことなどを挙げる。ここに、子どもの興味や生活実態へのまなざしを窺うことができる。

井上にとって、当時、これをもっとも具現している実践が「従来の常会」であった。「個性」や「社会性」を論じるときにも引き合いに出された常会

が、ここでも「新教育に於て、民主的なる行動をなし得る人間をつくる意味に於て益々重要性をもってきた」として評価されていたのである。それが実態を言い当てていたかどうかはともあれ、報徳教育から新教育へと移行する際、いかに常会が多様な意義付けを付与され、単なる継続ではなくむしろ発展が志向されていたかがわかる。

#### ⑤実証の原理

これは「本校の目標」のなかでは「実態調査」と記された項目であり、以下のように短く述べられているのみである。

- たえず進歩している社会に順応させる能力と態度を養ふ目的とす  
注入するよりもむしろ子供の能力を十分に延すこと
- すべてははっきりした事実に基づいて行動す  
事実に基づくことはすべてのことを把握的にする。民主主義のゆき方

これのみでは具体性に乏しいが、先述した「自発性の原理」の中で子どもの「自発活動」を促すに際し、「遊びの実態調査の必要性」、「子供の生活環境をみてそこから探す＝実態調査の必要」、「身体と精神の発達状況をみること＝実態調査の必要」が挙げられている。「実証の原理」は、子どもの実態から教育課題を見出そうとする文脈で語られていたことがわかる。

#### ⑥自由の原理

これも「自発性の原理」や「実証の原理」と同様に、子どもの実態や生活現実を尊重する考え方が示されている。

井上は、特に「学級経営の面」を取り上げ、「自由はたしかに与へられ許されなくてはあり得ないが、それと同時に他の一面は児童が自らつくり出さなくてはあり得ない」と述べ、「児童に毎日の生活を創り出させる」ことが重要であると述べる。井上は子どもに自由を保障すると同時に、生活を作り出す主体としての責任感も求めたといえる。特に学校生活の場面を取り上げて、以下のようにも述べている。

学校といふ団体の場合、その学校がどうあ

りたいか、そこに権威があり、それを知る必要がある。それを問題にしないでめいめい自分ではああしたいこうしたいと言ひ思ひ又やってみては、不幸な混乱した学校であって幸福の学校ではない。

学校の規則などおしつけられて守ると思ふと圧迫になるが、自分からそれに従ふ場合は、自由の境地だと思ふ。自分自身の怠けたい心と戦ふ強制は、たしかに必要だ。

そこには、学校生活を営む主体として、自ら学校の規則を咀嚼し、言動を選択する姿が「自由の境地」として描き出されている。

これと同時に論じられているのは、「先生と児童の学級に於ける関係」であった。井上は、従来の「権威、命令をもつてのぞんでゐた」姿を改め、「子供の友達」となり「さうしているうちに子供が先生の偉さ、経験の深さに感じて権威をもち、子供に尊敬され、慕はれる先生でなくてはならない」と述べる。

「自由の原理」が目指していたのは、子どもを自律・自立した人間に育てること、そしてそれを実践し得る教員の力量向上であったといえる。

#### ⑦ 効率の原理

「効率の原理」は、学習指導の在り方として述べられている。井上は効率的学習とは「効率は成績をあげることではない」、「百パーセントの状態」を目指すことだといひ、以下のように述べる。

その児童はそれだけの素質と体力と境遇が与へられてゐるが、それをみつめ天分一杯に働かせることが、効率的学習である

そのために、福沢校では「各学級で土曜日には必ず来週の子定を先生と生徒と作り、之を校長先生のもとに提出することになっている」という。つまり、個々の児童が自ら目標を設定し、そこに全力を尽くす「百パーセントの状態」が目指されていたのである。

#### (3) 新教育への「転回」

以上、井上の講演原稿に依りながら具体的な内容を見てきた。そこに通底するのは、従来（戦前）の教育実践が陥っていた権威主義的、「型」には

めるような在り方を否定し、児童の実態を起点に自律・自立した人間形成を目指すという方向性であったといえる。井上は、1960（昭和35）年の『「わかる」ことの追求』において、この当時を以下のように回顧している<sup>52</sup>。

もっと子ども自体にまかせよう。子どもは子どもで伸びる必然性を常に内側にはらんでいるのだ。そこから再出発しよう。それが私たちの教育に対する反省であり、かつ教育への開眼でもあった。（中略）

「言うべき時に言える子」を作ることは、民主主義教育の第一歩であると考えた。したがって、教室においても、子どもたちの自発性、自主性を伸ばすことを中心において作業単元を構成し、子どもらしく生き生きした授業、子どもの瞳が輝いている授業をそのねらいとした。いなかの子ども特有な「ものおじ」や「卑屈さ」から子どもたちを脱皮させようと願った。

ここに、戦前の教育を「反省」し、「ものおじ」や「卑屈さ」からの脱却を追究していったことがわかる<sup>53</sup>。これまでの検討を考え合わせれば、それが戦前の報徳教育を捨て去るのではなく、「戦時的」な部分是否定した上で再評価する過程であったことがわかる。井上は民主教育を可変的・創造的・構成的な教育実践と理解することで、「発展変容性」をもつ報徳教育と類似のものと考えた。そこから「親心を以て児童の徳の愛撫育成する」という言葉、「推譲」＝「人のために尽くす」という考え方、そして常会における「感心な人の発表」や自治的な運営への再評価が導き出され、教師論や学習論としての再構築へと「転回」していったのである。（須田）

#### おわりに

今回、新発見の資料や当時の出版物、当事者への聞き取り、回顧録等を重ね合わせることで、1946年前後の福沢国民学校をめぐる状況が様々な明らかとなった。戦後初期の報徳運動の指導者とGHQとの関係、先行研究で食い違いがあった石山脩平の招聘に至る事実関係、報徳教育から新教育研究そして「社会科」研究へと移行する理論や実践の実相など、いずれも教育史実および研究

上で空白となっていた部分であった。

特に本稿が焦点を当てた報徳教育からの「転回」に関して、それが報徳教育の再評価という文脈で推進されたことが浮き彫りとなった。井上喜一郎（福沢校の教員）にとっての新教育研究とは、加藤仁平ら報徳運動の指導者がインボーデン少佐に報徳を認めさせたことを追い風としつつ、報徳教育と「民主教育」とを対比することから始められていった。

一方、佐々井信太郎をはじめとする報徳運動の指導者にとって、報徳の教えである一円融合、推譲、分度、常会等は、普遍的な「根本義」であり、戦後の民主化で「平和の生活」を実現するために不可欠の理念として捉えられていた。そこに、日本人の自発的な民主化を狙っていたGHQの注目が加わり、戦後の報徳運動が継続的に取り組まれたのである。そのことは、例えば、1948年に創刊された『民主報徳』の誌名に象徴的に現れている。

報徳教育実践者、報徳運動の指導者、その両者に共通するのは、報徳の「戦時的」な運用こそが否定の対象であるとする姿勢であった。そこから、民主主義を標榜する社会と教育において、報徳の適用可能性を模索する姿が生み出されていく。

ただし井上喜一郎や加藤フクラの言を辿るとき、教育実践者として自らを問い質す側面を捉えることもできる。自らを「せんはん」と問いつつ福沢校に留まった加藤フク、あくまで「実践の中から新しいものを生みださん」とした井上喜一郎の姿に共通するのは、軍国教育を担った自らを否定しつつ、敗戦の混乱のなかを福沢の子どもと歩もうとする姿勢であったといえる。

井上喜一郎の思索は哲学的であった。デューイ哲学と報徳哲学との対比を経て、報徳教育の「戦時的」な部分の払拭と、教師の権威性の排除と子どもの自発性の尊重とが結びつけられていった。「個性の原理」、「社会性の原理」、「自発性の原理」などの考察に及ぶとき、繰り返し念頭に挙げられたのは戦前以来の児童常会や母子常会であった。そして民主教育に不可欠なものとして、継続が選択されたのである。福沢プランの典型的な評価である「きわめて郷土色の強い」点は、その思索と選択の結果だったといえるのである。（須田・武藤）

## 【付記】

本稿は、科学研究補助金（H22-24年度、若手研究（B）課題番号22730628「昭和前期における地域社会学校論の形成史研究」）の成果の一つとして、武藤正人氏の協力を得て作成したものである。

なお、本研究に関わる調査（須田、2011年）に際し、井上喜一郎ご子息・井上喜道氏には資料閲覧・使用に特段のご高配を賜った。ここに厚く感謝の意を表したい。併せて聞き取り調査（武藤、2006年）にご協力を賜った加藤フク氏、一寸木肇氏にもこの場を借りて深謝の意を表したい。

- 1 影山清四郎「福沢小学校・松田小学校の社会科（I）—教科としての社会科の確立—」（『横浜国立大学教育紀要』第36巻、1996年、29～42頁）。
- 2 石山脩平指導福沢小学校編『農村地域社会学校』、金子書房、1951年。
- 3 石川松太郎監『近代日本学校教育論講座 11 農村地域社会学校』、2001年、クレス出版、巻末解説、3～4頁。
- 4 1938年赴任の米山要助校長が足柄上郡を代表する報徳教育実践者であった。1939年に県指定研究「報徳教育の理論と実際」を受けたほか、後任の小沢永蔵校長時代には県知事が部落児童常会を参観している。その理論と実践は『報徳教育の理論と実際』1940年12月、『報徳教育と児童常会』1941年、大日本報徳社機関紙『大日本報徳』での10回の連載などにまとめられ、県内外に知られていた。
- 5 前掲、『農村地域社会学校』、5頁。
- 6 前掲、『農村地域社会学校』、6頁。
- 7 前掲、『農村地域社会学校』、123～155頁。
- 8 奥津重輝「福沢小学校二年三か月と思い出す人びと」（奥津重輝『十左エ門三百年史』、文化堂印刷、1986年）。井上喜一郎「授業随想」1986年4月～7月。
- 9 管見の限り、刊行物としては以下の通りである。
  - ・「旧職員座談会「福沢在職当時を語る—旧職員と語る福沢の教育十五年—」（福沢小学校『「わかる」ことの追求』東洋館出版社、1960年、321～327頁）。
  - ・福沢小学校、杉田真、瀬戸清治、山岸吉雄編

- 『道ひとすじに一井上喜一郎先生を送る記念誌—』神奈川県足柄上郡南足柄町立福沢小学校、1963年。
- ・宇佐美ミサ子「座談会戦後教育の回顧—福沢小学校—」(南足柄市史編纂委員会『市史研究あしがら』第四号、1992年2月、1～26頁)。
  - ・「福沢プラン 生活カリキュラムの周辺(露木喜一郎氏談)」(小田原市役所企画部市史編さん課『おだわら—歴史と文化—』第13号、2000年、24～31頁)。
  - ・「神奈川県足柄上郡福沢小学校元教員・露木喜一郎氏からの聞き取り調査(2003年8月28日)」(須田将司『昭和前期地域教育の再編と教員』、東北大学出版会、2008年、296～308頁)。
- 10 前掲、『農村地域社会学校』、124～126頁。
  - 11 井上喜一郎の残した書籍類に含まれていた。草稿メモは題名が判明するものとして、B0版の「新教育研究計画」、「新教育と報徳教育」、「新教育の理念」。内容から判別できるものとして、B0版〔道德教育の構想〕、児童用作文用紙の裏面に書かれた〔教育目標・方法案〕である。
  - 12 「神奈川県足柄上郡福沢小学校(国民学校)・加藤フク氏からの聞き取り調査記録(2006年8月18日)」(武藤正人『昭和戦前期における報徳教育運動の研究—神奈川県足柄上郡の報徳教育と「農村地域社会学校」—』筑波大学大学院修士論文、2007年、151～164頁)。
  - 13 報徳思想あるいは報徳運動については、見城悌治『近代報徳思想と日本社会』、ペリかん社、2009年に詳しい。
  - 14 小田原市編『小田原市史 通史編近現代』2001年、693頁。
  - 15 大日本報徳社「終戦に際し報徳社員諸君に告ぐ」『大日本報徳』終戦号(1945年12月)、2～4頁。
  - 16 国立教育研究所編『日本近代教育百年史8 社会教育(2)』(1974年)など。
  - 17 金原左門「戦後地方文化を検証するために—福沢教育プランへの道—」(『おだわら—歴史と文化—』第13号、2001年)では、佐々井らの運動の主力は一般国民向けのプロパガンダにあったのではなく、多数行われた「長期講習会」にあったのであり、戦前戦時中の言説のみで報徳運動を評価することに疑問を投げかけている。
  - 18 加藤仁平『報徳に生きる』東京教育大学内・日本図書文化協会、1955年、188頁。
  - 19 ダニエル・C・インボーデン「新生日本は二宮尊徳の再認識を必要とする」『青年』1949年10月号。ここでは前掲加藤仁平『報徳に生きる』191頁の要約から引用した。
  - 20 同上、加藤仁平『報徳に生きる』174頁。
  - 21 同上、177頁。
  - 22 この概要については、前掲『報徳に生きる』および八木繁樹『報徳運動—100年のあゆみ』(龍溪書房、1980年)を参照した。
  - 23 小田原市編『小田原市史 通史編近現代』、2000年、695頁。
  - 24 井上章一『ノスタルジック・アイドル二宮金次郎』新宿書房、1989年、101-109頁。さらに補足すれば、1946年3月に発行された1円紙幣、いわゆる「A 壹円券」は、二宮尊徳が肖像として採択されている。このことから、戦後間もない時期から、二宮尊徳に対するGHQや政府の肯定的な認識が窺える。
  - 25 前掲、『報徳に生きる』176頁。
  - 26 前掲、『報徳に生きる』13頁。
  - 27 前掲、『報徳に生きる』203頁。
  - 28 前掲、『ノスタルジック・アイドル二宮金次郎』109-111頁。なおこの中で井上は金次郎について、「忠君愛国といった面では、ニュートラルだった」としている。
  - 29 前掲、『農村地域社会学校』、124頁。なお、片上宗二はこの記述をもとに「最初の来校は1946年早春頃と考えられる」(『日本社会科成立史研究』風間書房、1993年、541頁)と述べているが、石山への依頼と来校のタイムラグを考慮していない分析といえる。
  - 30 井上喜一郎「本校における新教育の実際」〔井上喜一郎文書〕所収。この資料は同文書所収の「本校の目標」と内容的につながっており、二つを合わせると「健康の原理」を除く7観点の詳細がわかる。これは井上喜一郎の「昭和二十一年二月の新教育研究報告会」(中略)発表したが、発展、個性、社会性、自発性、実証、自由、効率、健康というような原理をあげたことを思い出す(奥津重輝『十左エ門三百年史』、215頁)との回顧と一致する。本稿2(1)③で検討しているように「新教育研究報告会」は1947年2月26日と考えられるが、この二つの資料はその際の講演原稿と推定できる。

- 31 奥津重輝『十左エ門三百年史』、61頁。奥津氏は1897年5月26日生、小田原中学、神奈川師範を経て1917年に教職に就く。文学好きで同人雑誌に関わったほか、綴方教育にも取り組む。1945年4月、福沢国民学校長に赴任。「先輩校長及び職員諸氏の企図を継承し「報徳教育の真髄を極めよう」と教員生活終生の悲願を立てた」(206頁)と回顧しているように、報徳教育を継承する人物であった。1947年7月、農地改革に伴い農業に専念する道を選択し教壇を去る。
- 32 福澤村国民学校教官 井上喜一郎「児童自治と母子常会」〔井上喜一郎文書〕所収。ここで井上は、石山を「先日教材研究課長になられた」と紹介しているが、石山が教材研究課長に任じられたのは1947年2月である(石山先生をたたえる会『石山先生を偲ぶ』1960年11月、2頁)。ここから「児童自治と母子常会」は1947年2月26日の「新教育研究報告会」における講演メモと推定できる。
- 33 石山脩平『留魂録』第三冊、1946年。同『留魂録』第四冊、1947年。
- 34 前掲、『十左エ門三百年史』、207頁。同書は石山を招聘した時期を10月の中間報告会の際としているが、本稿の検討からこれが記憶違いであると確認できる。
- 35 記載されている職員名から1946年度に作成されたものと確認できる。「計画」という文書の性格上、4月～7月ごろと推測できるが特定できていない。神奈川県では「新教育」研究指定校に作成を求めたようであり、「神奈川県新教育研究要項」(横浜市総務局市史編集室『横浜市史Ⅱ資料編8 戦前戦後の都市と教育』横浜市、2001年所収)では横浜市内の指定校の「計画」が多数掲載されている。
- 36 前掲、「本校における新教育の実際」。
- 37 前掲、『農村地域社会学校』、130頁。神奈川県南足柄町立福沢小学校『創立六十年戦後教育研究十五年』、神奈川謄写堂、1960年10月、16頁。
- 38 前掲、『十左エ門三百年史』、208頁。
- 39 同上、208～209頁。
- 40 前掲、宇佐美ミサ子「座談会戦後教育の回顧—福沢小学校—」、6頁。
- 41 井上喜一郎「新教育と報徳教育」〔井上喜一郎文書〕所収。
- 42 前掲、須田将司『昭和前期地域教育の再編と教員』、249頁。
- 43 前掲、「新教育と報徳教育」。
- 44 同上、「新教育と報徳教育」。
- 45 前掲、「本校における新教育の実際」。
- 46 神奈川県足柄上郡福沢村福沢国民学校『報徳教育と児童常会』、1941年、1頁。
- 47 前掲、「本校における新教育の実際」。
- 48 前掲、「新教育と報徳教育」。
- 49 前掲、「本校の目標」。以下、本節では特に断りの無い限りここからの引用とする。
- 50 前掲、「本校に於ける新教育の実際」。
- 51 1940年9月に開始された、婦人常会と部落児童常会を合流させた常会(前掲、須田将司『昭和前期地域教育の再編と教員』、234～243頁)。
- 52 前掲、福沢小学校『「わかる」ことの追求』、36～37頁。
- 53 〔井上喜一郎文書〕中には「言うべき時に言える子」との文言はみられず、それは1947年度以降に生み出された文言と考えられる。